

世間と話題の本

『クマコミ』などで話題の本

『不滅の鳥 十二国記』 小野不由美(新潮文庫)
 『十二国記』とは、小野不由美が描く、古代中国風の異世界ファンタジー作品のシリーズ名である。二〇〇二年にはNHKでテレビアニメ化もされた。

二〇〇一年以降シリーズの新作は発表されていなかったが、六年半ぶりに本作が新作として発表された。本作はシリーズの番外編という位置づけになっている。

新作がなかなか発表されない中、シリーズは今なお幅広い世代に愛読されており、絶大な人気を誇る。もともとはシニア向けで出されていた本なので、ぜひ読んでみるとよいでしょう。

『真夏の方程式』 東野圭吾(文藝春秋)

四月からテレビで放送された、福山雅治さん主演の人気ドラマ「ガリレオ」のシリーズでもある本作を原作として、六月二十九日に映画「真夏の方程式」が公開されました。映画を見る前に一度読んでみてはどうでしょうか？他の「ガリレオ」シリーズも注目です。

『ガリレオの苦悩』 東野圭吾(文藝春秋)

最近第二回目の実写ドラマ化、そして映画化もされるガリレオシリーズ…。ここまでの話題を呼んだ『ガリレオ』の真髓に迫る！

天才物理学者・湯川学と、警視庁捜査一課の草薙・内海…。主にこの二人が解決に導く(草薙や内海は事件を持ち込むだけのことがほとんどなわけだが…)。常識では考えられない出来事の数々。何が面白いのか、それは冷たく見える湯川(ガリレオ)が、心の奥には義理堅く、人情深い心を持っている点である。

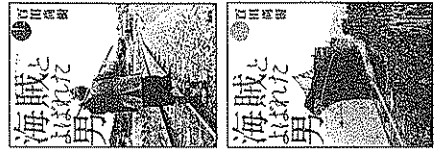
私はドラマも見ていますが、原作のガリレオの心の奥の温かさが、うまく表現されており、残念でならない(ドラマを否定するつもり

はまったくないが)。ドラマはドラマで面白いが、原作のほうが、断然面白い!!! (あくまで個人の感想です。一応)

ガリレオの本当の魅力に気付きたい人は、一度、図書館のドアを開け、試しに読んでみてはいかがだろうか。

『賞をとった本』

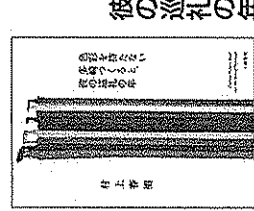
『海賊とよばれた男』 百田尚樹(講談社)



私が紹介するのは、二〇一三年の本屋大賞を受賞した、百田尚樹作の『海賊とよばれた男』です。石油会社を営む国岡鐵造は一九四五年八月十五日の終戦で何もかも失ってしまいます。しかし彼は、売る石油がない状態にも関わらず、社員を一人も解雇せず、旧海軍の残油集めなどで会社を続け、波瀾万丈な出来事乗り越えて、企業を再生させていくというものです。これは本当にあつた話のもとになりました。興味を持った方は、ぜひ読んでみてください。

『非常に売れている本』

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』 村上春樹(文藝春秋)



これは、主人公多崎つくるとの、喪失と回復の物語である。「大学二年の七月から、翌年の一月にかけて、多崎つくるとはほとんど死ぬことだけを考えて生きてきた。」という文から始まるこの作品。高校時代に仲の良かった五人組。大学二年生の時つくるとは、彼らから突如理由も告げられずに絶交を言い渡された。二十六歳になったつくるとは、十六年ぶりにかつての仲間達の元を訪れる。

前作の『1Q84 BOOK3』(新潮社)以来三年ぶりの長編小説であるこの作品は、発売後七日で部数が八刷一〇〇万部を突破した。たちまちミリオンセラーとなった村上文学の最新作。鎌倉高校の図書館にも置いてあるので、一度読んでみてはいかがだろうか。



新任の先生方のオススメの本

理科 大久保嘉雄 先生

『名もなき毒』 宮部みゆき(文藝春秋)
 毒と悪意をテーマにしたシリーズ第二作です。大企業の広報室に勤める主人公が毒殺事件を解決するとともに、元アルバイト女性の執拗な悪意のある態度の謎も解いていきます。彼女の主人公への迫り方は圧巻です。心に生じた奇立ちが標的を見つけると、悪意を生じ毒を放ちます。私たちは奇立ちを感じたとき、どのように処理すればよいのでしょうか。

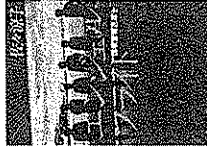
「人間てのは、誰だってね、相手がいちばん言われたくないと思ってることを言う口を持つてゐるんだ。どんなへりでも、その狙いだけは、そりゃあもう正確なもんなんだから(第一作「誰か」)。宮部みゆきの本は、会話文が心に響きます。それを発する多彩な登場人物の設定に納得します。大学生になり引越した息子の部屋に、そこに置いてきた三冊のうちの二冊です。」



体育科 奥島 傑良 先生

『エンジニアのライオ』 佐々淳子(集英社)

自分が書店で手にすることはなかったろう本ですが、妻が面白かったと言うので拝借して読みました。本書は海外で亡くなった人を家族の元へ送り返す国際霊柩運送士のノンフィクションです。二年前に起きた東日本大震災の行方不明者の捜索が、今年になってある県の海岸で行われたというニュースを見て、率直に「何で今さら…」と疑問に感じましたが、本書を読んで、その疑問に対する答えが示されているように思いました。死や弔いについて改めて考えさせられる一冊です。



地歴科 水元 利昌 先生

『双頭の鷲』 佐藤賢二(新潮文庫)
 一三三九年以来、イングランドとの間に始まった百年戦争は、イングランドの王太子である通

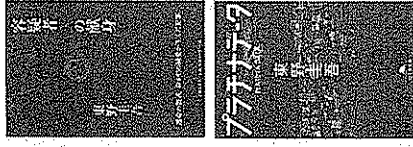
称「エドワード黒太子」率いる長弓兵の活躍により、フランスを劣勢に陥らせた。この危機的な状況に慧星の如く救世主が現れた。その名は、ベルトラン・デュゲ克蘭。彼は類を見ない奇抜な戦略と無双の腕力で次々にイングランド軍を打ち破つていった。ジャンヌ・ダルクは日本で最も知られたフランスの聖女・英雄の一人ですが、実は彼女の出現以前に、フランス史上最強の軍神と謳われた男が存在しました。この作品は、日本ではあまり知られていない、百年戦争中、ごく短期間ではあつたがフランスを優勢に導いたもう一人の英雄の生涯を描いた作品です。高校世界史では語られることのない物語。是非、一度読んでみてください。



数学科 松本 拓也 先生

『容疑者Xの献身』 東野圭吾(文藝春秋)

私がおすすめする本は、東野圭吾さんの小説です。最近では「ガリレオ」や「ブラチチチータ」などテレビや映画で作品を楽しんでいる人も多くいます。私は『容疑者Xの献身』を読んで、ラストで大きな衝撃を受け、フアンになりました。「どちらかが彼女を殺した」のように、読者に答えを明かさなような作品袋とじを開けると解説が載っています。や「秘密」のようにファンタジーの要素を取り入れた作品もあります。「ミステリーを読みたい時は、東野圭吾作品を選べば間違いない」と思えるくらい、どの作品も安定して面白いです。是非読んでみてください。

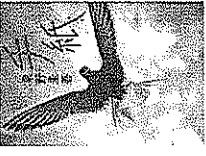


地歴科 鎌田 剛志 先生

『手紙』 東野圭吾(毎日新聞社)

つい先日までTV放送されていた科学ミステリードラマ「ガリレオ」シリーズの著書でもある、東野圭吾さんの『手紙』という作品。映画化もされた作品なので知っている人も多いのではないかと思います。身内(兄)が犯罪加害者になってしまった主人公の心の動向を追った作品です。「人権侵害」「差別」、それらは皆が「よくないものである」と認識しているにも関わらず、なくなることはない現実社会。「差別はいけないのだ」という表

面だけのきれいなことで片付けない、考えさせられる作品です。私はこの作品の映画版の方を教材に用いたことがありますが、そのときも皆さまさまざまな意見や感想をもっていました。また読んだことがないという人はぜひ一度読んでみてください。



理科 吉村 泉美 先生

『容疑者Xの献身』 東野圭吾(文藝春秋)

ガリレオシリーズ初の長編で映画化もされています。天才物理学者・湯川VS天才数学者・石神が見所である本作ですが、湯川、石神、様々な登場人物の想いが複雑に絡み合っています。話が進むにつれて次々に明かされていく真実。そしてそこで気づく張り巡らされた伏線の数々にまた読み返したくなる一冊です。

また、この一冊だけではなく、「ガリレオ」シリーズを通しておすすめします。物理が苦手、難しいと感じる方も多いかもかもしれませんが、まずは物語を通して物理に触れてみませんか？このドラマ版の台詞通り「実に面白い」ですよ。



編集後記

私は今回初めて、図書委員として館報「図書」の編集に携わり、分からないことが多い中、教頭先生をはじめ様々な先生に協力いただいて、第一〇六号を無事発行することができました。とても嬉しく思っています。

館報「図書」を作り上げていく中で、私は改めて本の素晴らしさに気づくことができました。それだけでなく、藤島の先生・生徒がいかに本を愛しているのかも知ることができました。館報「図書」制作グループの話し合いでは、「こんな本のいいところを書きたい」とか「この本すごくおすすめです」といった、本に対する熱い想いを語ってくれる生徒が多く、その話を聞きながら、やはり本についていかに何度も思いました。

藤島高校の生徒は、勉強に部活動に忙しい毎日を送っています。しかし、この館報「図書」を読み、少しでも図書館に本を読みに来てくれる人が増えたらいいと思います。あなたも、のめり込めるような一冊に出会えるかもしれませんよ。

館報「図書」編集長 三年 古市 陽香